

全世界 62 家琴社聯合 "四海琴心"雅集 第 15 場 玉堂琴社主催

查阜西先生 生誕 130 周年紀念 暨 坂田進一先生 逝世三周年 稗田浩雄先生 一周忌 紀念雅集



稗田浩雄先生

查阜西先生

坂田進一先生

《查阜西先生と日本の古琴》

第 1 章 查阜西先生の 1958 年日本公演再現 — 查阜西と坂田進一少年 —

琴簫合奏《梅花三弄》

琴：秋月 洞簫：王明君

《平沙落雁》

陳雅

《関山月》

劉宗翰

《瀟湘水雲》

朱以維

以上查阜西先生日本公演曲目

第 2 章 查阜西先生の日本琴学調査 — 日本琴学の特色である《東皐琴譜》《玉堂琴譜》から

琴歌《浪陶沙》

秋月

東皐琴譜正本

琴歌《梅枝》

秋月

玉堂琴譜 瘦蘭齋珊定

— 休息 茶菓提供 —

第 3 章 查阜西先生回想 及び 自由彈琴交流 (3 時半すぎ全体撮影し終了予定)

時間：2025 年 6 月 29 日（日）午後 1 時 20 分受付開始 午後 1 時 40 分開会
場所：彩翔亭（東京郊外茶室）

本日は遠い所お集まりいただきありがとうございます。

それでは“四海琴心”査阜西先生生誕 130 周年記念、並びに坂田進一先生逝世三周年、稗田浩雄先生一周忌記念雅集を始めたいと思います。進行を勤めますのは玉堂琴社の私、荒井雄三、号秋月と申します。

「四海」とありますように日本から世界に向けて琴の心をお届けするという趣旨のもと本日の雅集を催しております。ご参加の皆様は、日本人はもちろん在日華人の方、ロンドンや香港からお越しの琴人など、まさに「四海」の琴友が会しています。本日は日本での開催のため日本語を主な言語として進行いたしますが、プログラム後半（第 7 頁）に中文要旨も併記しておりますのでどうぞご参照ください。

今日の雅集は今年 4 月から年末まで世界 62 の琴社が連続して行う日本篇として玉堂琴社が主催いたします。日本篇の特徴として「査阜西先生と日本の琴学」と副題し、第 1 章、第 2 章で査阜西先生と日本の関りを、要点を絞ってご紹介します。その後休息として、抹茶と和菓子の提供がございます。

休息後の第 3 章として最初に玉堂琴社朱以維先生から査阜西先生についてのエピソードを要約してお話しいただきます。プログラムに本文がありますのでご参照ください（日訳第 5 頁、中文原文第 9 頁）。

それから残りの時間まで参加者による弾琴の場を設け、四海琴心に相応しい中国と日本など四海の方の交流の場とし、最後に全体での記念撮影ができればと予定します。3 時 55 分までに全て片付け撤収を終えたいと思います。なおこの様子は録画され編集を加え改めて 7 月 13 日日曜日から公開される予定です。詳しくは玉堂琴社のサイトや SNS をご覧ください。

査阜西先生（1895—1976）は中国の航空事業の発展に貢献された方であると同時に、20 世紀最大の琴人の一人としてその功績は多方面にわたっています。

中華民国時代の今虞琴社の設立、新中国以降の北京古琴研究会の設立などの演奏、普及活動。琴簫合奏の改革、琴歌の復興など。

また 1950 年代の中国国内琴人の調査と貴重な録音記録。

生涯を通じての琴

学関係書籍収集整理

（写真は秋月

1994 年撮影、北

京・中央音楽学院

査阜西記念室準備

室内の膨大な蔵書

の一部、左端は若

き趙家珍先生。)



そしてたくさんの重要な著作があります。例えば入門書としての『古琴初階』（沈草農、張子謙との共著）、大部の琴譜集『琴曲集成』、歴代琴曲の工具書としての『存見古琴曲譜輯覧』、汲めども尽きない内容の『査阜西琴学文萃』などは四海の琴人にとっても座右の書となっています。

では「査阜西先生と日本の琴学」の関係では、査阜西先生はどのような貢献をなされたのでしょうか？

第1章 査阜西先生の日本公演再現—査阜西と坂田進一少年

1958年、査阜西先生は総勢65名の中国歌舞団の副団長として初めて日本を訪れ各地で古琴の演奏を披露され、その高雅にして深遠な琴音は日本の聴衆を魅了し深い感銘を与えました。その中に当時11歳の坂田進一少年の姿がありました。小学生であった坂田少年は初めて耳にする古琴の音色に心を奪われ琴の道を志す決意を固めました。この出会いこそが坂田先生の一生を貫く古琴芸術の探求の原点となり、後に日本を代表する琴家となる契機となったのです。



この出来事が、現在の日本琴学の第三の発展期（第一期は奈良時代から平安前期、第二期は江戸時代）の先鞭となる出来事であったとしたら、査阜西先生訪日公演の意義は極めて重大です。

ここで坂田進一先生の紹介を少ししておきましょう。

坂田進一先生 1947-2022 は号を瘦蘭齋。日本の雅楽の琵琶の家系に生まれ幼少から日本音楽と西洋音楽の教育を受けました。東京芸術大学作曲科を卒業してすぐ、1970年日本最古の琴社である東京琴社を設立し2020年閉社まで50年間の長きにわたり琴社の活動を続けました。古琴は初学の九嶷派の風格に中国南北の琴家（張子謙先生からは《龍翔操》を直伝）の長を吸収し、壮年期には天衣無縫で繊細豪胆な独自の風格を作り上げました。中国古典音楽に精通し晩年は上海音楽学院で教鞭をとりました。また先生の別の側面として2005年中国映画《一輪明月》に弘一法師（李淑同）が留学した東京美術学校（現在の東京芸大）教授・黒田清輝役として出演していることも印象深いことです。



最も重要な出版物に『東阜琴譜正本』（上海音楽出版社2016年刊）と『「玉堂琴譜」論攷—浦上玉堂 琴の世界—』（学藝書院2021年刊）があります。これは日本伝来の代表的な琴譜『東阜琴譜』と『玉堂琴譜』の全貌を明らかにし校訂出版し定本を定め後学の益にするという、琴学史の長い射程を見据えた労作です。査阜西先生の『琴曲集成』を補完する琴譜であり、例えば『東阜琴譜正本』について李鳳雲先生は「功德無量」と讃えています。坂田先生は上海今虞琴社名誉理事でもあり、先月は戴曉蓮先生も来日参加され東京で夫人主催の私的な追悼会が開かれました。今日の雅集はまた3年前の6月24日に亡くなられた先生の公の追悼会を兼ねるものです。（より詳細な紹介は玉堂琴社ウェブ

qsshc.mond.jp/yutangqinshe/ や中国語放送「一个日本人的中国梦」などをご覧ご視聴ください。）

査阜西先生来日公演の三つの曲目

中国歌舞団は日本国内の巡回公演にあたって演奏日ごとに異なる三種類のプログラムを用意しました。査先生の古琴は琴簫合奏《梅花三弄》、《平沙落雁》、《関山月》と独奏《醉漁唱晚》、《洞庭秋思》、《瀟湘水雲》の組合せが用意されました。このうち坂田少年が聴いた曲は《梅花三弄》でした。坂田先生は半世紀後、次のように回想されています。「査阜西・王鉄錘両先生の琴簫合奏「梅花三弄」は、少年の耳と記憶の底に確りと残り未だに新しい」（坂田進一『瘦蘭齋



樂琴異聞』2009年3月第59話「繰繰一半 如一昨夢 二 查阜西先生」)。

本日は《梅花三弄》、《平沙落雁》、《関山月》と《瀟湘水雲》を演奏いたします。特に《梅花三弄》については洞簫のゲストとして昭和音楽大学教授の王明君先生をお迎えし琴簫合奏でお聴きいただきます。また《瀟湘水雲》は査先生得意の曲として“査瀟湘”とも呼ばれ有名です。

第2章 査阜西先生の日本琴学調査

査阜西先生は来日公演の慌ただしい日程の中にも江戸の琴学資料を短時間で蒐集し、東阜心越の流れをくむ小畑治良（松雲）琴士を訪問されました。その成果は『歴代琴人伝』や『文萃』中の「清代著譜琴家的師匠淵源」の「和文注琴譜」などにまとめられています。そこから中国国内でも日本の琴学に対し関心が高まりました。査先生は日本琴学紹介にも貢献を果たされたのです。



しかし今日、日本琴学研究は先にご紹介した坂田先生の『東阜琴譜』『玉堂琴譜』研究の他、岸辺成雄先生の『江戸時代の琴士物語』、山寺美紀子先生の『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』など、査先生の後いくつかの優れた進展を見せています。江戸期の琴学については昨年8月19日に亡くなられた稗田浩雄先生も忘れてはなりません。今日の雅集はまた稗田先生の追悼会を兼ねるものです。

稗田浩雄先生 1945-2024 は、世界的に著名なシンクタンク・未来工学研究所の理事として航空宇宙事業などで日本政府や中国高官とも様々な提言の機会を持たれた点は査阜西先生と似ているかもしれません（写真は日本・福田首相(左)、中国・王毅外相(右)

と)。古琴は、岸辺成雄先生に琴学史を、蔡徳允先生に初学を、許建先生と王鐸先生に打譜を学び、呉文光先生と共同研究をされました。



平生琴興，私淑左太冲，每思山水發清響；

憂國鐵腸，尤推李伯紀，幾為邦家獻遠猷。

（蓉堂居士《琴士稗田先生大人輓聯》并序）

著書に江戸期琴士の精神世界を精緻に研究された文字通りの大著『近世琴学史攷』（東洋琴学研究所2020年限定50部刊）があります。査阜西先生が中国に紹介された江戸琴士の系譜は、60年後、稗田先生の研究では表（12頁）のように発展的に精緻かつ広汎にとらえることができるようになりました。

琴歌の復興 — 琴歌の宝石箱《東阜琴譜》《玉堂琴譜》から琴歌各1曲

従って本雅集では査阜西先生の日本琴学調査に触発され、日本琴学の特色であり、琴歌の宝石箱のような《東阜琴譜》と《玉堂琴譜》から琴歌各1曲を坂田先生の校訂譜を用いて演奏いたします。「**琴歌の復興**」は査阜西先生が特に留意された点でした。

《浪陶沙》 抛『東阜琴譜正本』

把酒祝東風，且共從容，垂楊紫陌洛城東。

總是當年攜手處，游遍芳叢。

聚散苦匆匆，此恨無窮。今年花勝去年紅。

可惜明年花更好，知與誰同？

北宋の欧陽脩の去年の春に別れた人を思う詞です。東皐琴譜の普及本にはカタカナで江戸時代当時の唐音（南京官話や浙江の発音が混在したもの。山寺三知先生の研究参照）が書かれています。琴歌弾唱にあたって査阜西先生は「郷談折字」（漢字の発音にあたって、自分の地方の方言「郷音」を用い、その地方独特な発音の開閉と声調の高低を旋律に折り込んでいくこと）を強調されました。本日は厳密な「郷談折字」ではありませんが、郷音である日本の唐音で歌います。

《梅枝》 抛『瘦蘭齋珊定玉堂琴譜』

江戸時代の文人芸術家・浦上玉堂の『玉堂琴譜』は催馬楽（平安時代の流行歌曲。中国唐風の旋律と日本の歌詞を持つ）に、玉堂が琴の手付を加え琴歌としたものです。玉堂の根拠とした古譜は平安末の『仁智要録』『三五要録』で、そこには一千年前の当時の旋律が保存されています。例えば本日演奏します《梅枝》は『源氏物語』の章の一つともなり、物語の中で歌われている旋律なのです。

催馬楽《梅枝》詞：

第一段 梅が枝にきいるうぐいすや 春かけてはれ

第二段 春かけてなけども未だや 雪はふりつつ

第三段 あはれそこよしや 雪はふりつつ

Japanese Pronunciation:

Mume ga E ni ki-iru Uguisu ya, Haru kakete hare.

Haru kakete nakedomo imada ya, Yuki wa furi-tsutsu.

Ahare soko yoshi ya, Yuki wa furi-tsutsu

第3章 茶菓休息後の査阜西先生に関連したエピソード、及び中国日本の琴人交流雅集

査阜西先生と葉名珮先生 朱以維 （日文訳 中文原文は第9頁）

私の恩師である葉名珮（よう・めいはい）先生は、1943年春、14歳のときに淮陽の名家・楊子鏞先生のもとで琴学の手ほどきを受け古琴の道に入られました。

翌1944年には上海の今虞琴社に入社し、当時は最年少ながらもすでに琴を弾きこなす社友として活動されていました。今虞琴社では、張子謙先生、李明徳先生、徐元白先生らのご指導を受け、また査阜西先生、呉景略、沈草農先生など今虞琴社の創設メンバー、さらに葉大密先生、陳肅亮先生たち先輩・同門からも深い愛情と教えを受けられました。

1950年末、葉先生は成都で入隊され、1952年に復員して上海に戻られた後も今虞琴社の活動にたびたび参加され、琴社の師友たちと学び交流を続けられました。

1957年に結婚されてからは、夫と共にたびたび旅に出るようになりました。ある旅の途中、列車の中で偶然



にも査阜西先生御夫妻と再会します。かねてより気にかけていた若い後輩が安定した職を得て結婚したことを喜んだ査先生は、夫妻に磁器のオンドリの置物を贈り、夫婦円満・白頭偕老（生涯連れ添うこと）を願われました。このオンドリは葉先生がずっと大切にされており、晩年ふと旧物を取り出し、その一対を目にするたびに、当時の査先生の温かな心遣いを思い出されたそうです。往時の師友の多くはすでに故人となりましたが、若き日の葉名珮への支えと導きは、ずっと葉先生の心の中に生きていたのです。



（※ オンドリの写真は 2021 年 12 月 15 日葉先生宅にて撮影。蘇州の曹小姣姉の提供。）

1958 年葉先生は包頭に転勤、のち南昌にも赴任されましたが、今虞琴社の師友への思いは変わらず、出張や帰省の機会を活かして師を訪ね歩きました。たとえば北京に行けば何とかして査阜西先生や呉景略先生を訪ね、上海に行けば張子謙先生や姚丙炎先生の元を訪れました。

1960 年北京出張の折には査阜西先生を訪問。その頃、査先生は全国の琴人の追加調査や資料収集に従事しており、成長を見守ってきた後輩・葉先生に対して、さらに次世代の後輩のために録音を残すよう勧めました。しかし当時、葉先生はしばらく琴から離れており、事前練習もないまま、記憶を頼りに《憶故人》を弾き切りました。この曲はかつて“浦東三傑”の一人・彭祉卿（ほう・しけい）先生によって広められ、同じく“浦東三傑”の張子謙先生を通して葉先生に伝わったもの。二人とも査先生の親友であり、長い歳月を経て師の面前でその曲を弾いたことに、双方とも万感の思いがあったことでしょう。

この録音は 1996 年に中国唱片上海公司の“老八張”シリーズには収録されなかったものの、2019 年に中国芸術研究院が出版した《絲桐神品—古琴（1950-1970）》に収められ、60 年前の《憶故人》がようやく世に出ました。じっくり聴くと 30 代前半と 80 代以降とでは、葉先生の琴風が大きく変わっていることが分かります。この録音のあと、他の曲を弾こうとした葉先生は、弾き続けることができませんでした。査先生は「それではいけません」と言い、葉先生は「はい、いけません」と答え、ご自身の困難を語られました。査先生は「あなたの基礎はしっかりしている、諦めないで、仕事の合間に練習を続けなさい」と励まされました。この励ましは葉先生の心に深く刻まれ、その後も仕事・生活・社会の変化の中で時間と空間を工夫しながら琴の練習を続けました。

そして定年退職後には同好の琴人たちと共に「呉門琴社」を設立。生涯にわたり伝統を守り、査先生をはじめ琴界の先人たちの「今虞精神」を継承し、琴社の運営にも力を注ぎました。門下生も多く学界・教育機関の枠を超えて独自の伝承の道を模索されました。



張大千と

徐元白（中央）と



《查阜西先生与日本古琴》 中文要旨

欢迎各位不辞辛劳，远道而来。

现在，我们将正式开始“四海琴心”——查阜西先生诞辰一百三十周年纪念、坂田进一先生逝世三周年、以及稗田浩雄先生一周年忌辰纪念雅集。

我是本次活动主持人，玉堂琴社荒井雄三，号秋月。

正如“四海”所寓意的那样，本次雅集旨在从日本出发，将琴心传递到世界各地。出席的各位嘉宾中，既有日本朋友，也有在日华人朋友，以及来自伦敦、香港的琴人，真正体现了“四海琴友齐聚一堂”之意。鉴于本次活动在日本举行，主要使用日语进行交流。不过在节目单后半部分（第7页）也附有中文要旨，敬请参阅。

本次雅集由玉堂琴社主办，是“四海琴心”系列的“日本篇”一环。“四海琴心”系列自今年四月起至年末，由全球六十二家琴社接力举办。作为“日本篇”的特色，我们特设“查阜西先生与日本琴学”为主题，在第一、第二章中，择要介绍查先生与日本之间的渊源与交流。

其后设有简短茶歇，届时将奉上抹茶与和果子。

第三章开始，将由玉堂琴社朱以维先生，节选讲述查先生相关的逸事。详细内容请参阅节目册中原文。

随后为自由琴人雅集之时段，欢迎与会琴人即兴登场演奏，以音会友，体现中日琴缘之“四海琴心”。

活动最后拟集体合影留念，并请于下午三点五十五分前完成清场撤收。

本次雅集全程将录影记录，并经剪辑后，预计于七月十三日（星期日）起公开发布。详细信息请关注玉堂琴社官网及各 SNS 平台社交媒体。

查阜西先生（1895–1976），不仅是中国航空事业的重要奠基者，更是二十世纪最杰出的琴家之一，其贡献横跨多个领域。他是民国时期今虞琴社的创社者之一，新中国成立后又发起创立北京古琴研究会，积极推动古琴演奏与普及事业。同时，他改革琴箫合奏形式、提倡琴歌复兴。1950年代，他主导下对中国境内琴人进行系统调查，并留下大量珍贵录音。

他一生致力于琴学书籍的搜集整理（照片2为1994年秋月在北京中央音乐学院查阜西纪念室筹备期间所摄，图中藏书极为丰富，左侧为青年时期的赵家珍先生）。

查先生著作等身，其中《古琴初阶》（与沈草农、张子谦合著）为入门教材；大型琴谱集《琴曲集成》；历代琴谱琴曲工具书《存见古琴曲谱辑览》；以及内容精深、影响深远的《查阜西琴学文萃》，皆为当今海内外琴人案头必备之书。

第一章 查阜西先生在日公演的再现——查阜西先生与坂田进一少年

谈及“查阜西先生与日本琴学”的关系，不得不提1958年那次意义非凡的访日演出。（照片3-1）

1958年，查阜西先生以中国歌舞团副团长身份，首次随团访问日本。在多地公开演奏古琴，其高雅深远的琴音深深打动了日本听众。正是在那场演出中，当时年仅十一岁的坂田进一少年在观众席中，首次聆听古琴之音，心神为之所摄，立志走上古琴之路。此一瞬间，成为他毕生致力于古琴艺术追求的原点，也最终成就其成为日本代表性琴家的道路。

若说这一事件拉开了日本琴学第三次发展期的序幕（第一次为奈良至平安前期，第二次为江户时代），则查阜西先生的访日演出，其历史意义可谓深远重大。

在此，让我们简要介绍坂田进一先生。

坂田进一先生（1947–2022）号瘦兰斋。出身于日本雅乐琵琶世家，自幼接受日本与西洋音乐教育。自东京艺术大学作曲系毕业后，于1970年创立日本最古老的琴社—东京琴社，并主导社务五十年，直至2020年闭社。他初学九嶷派风格，兼采南北琴家所长（曾得张子谦先生亲授《龙翔操》），中年之后形成风格独具、天衣无缝、细腻而豪迈的琴风。精研中国古典音乐，晚年曾任教于上海音乐学院。

此外，坂田先生亦曾出演2005年中国电影《一轮明月》，饰演弘一法师（李叔同）留学东京美术学校（现东京艺术大学）期间的恩师、画家黑田清辉一角，亦为其鲜为人知的一面。（照片3-2）

其重要出版成果包括：《**东皋琴谱正本**》（2016年，上海音乐出版社）与《**“玉堂琴谱”论考——浦上玉堂 琴の世界**》（2021年，学艺书院）。这两部著作首次系统揭示并校订出版了日本流传的重要琴谱，为后学奠定定本，琴学史上其学术意义非凡。可视为对查阜西《琴曲集成》的重要补充。例如李凤云先生对《东皋琴谱正本》的评价为“功德无量”。

坂田先生亦为上海今虞琴社名誉理事。上月，戴晓莲先生曾专程来日，在东京参加夫人主持的私人追悼会。今日之雅集，也同时作为2022年6月24日坂田先生三周年忌辰之公共纪念。

（有关先生更详尽介绍，敬请访问玉堂琴社网站 qsshc.mond.jp/yutangqinshe/，或于bilibili等平台搜索中文节目《一个日本人的中国梦》。）

查阜西先生访日演奏的三种曲目

中国歌舞团在日本巡演期间，按演出日准备了三套节目单。查先生的演奏古琴曲目包括琴箫合奏《梅花三弄》《平沙落雁》《关山月》以及独奏《醉渔唱晚》《洞庭秋思》《潇湘水云》。坂田进一少年当日所听，即为琴箫合奏《梅花三弄》。他半个世纪后在《瘦兰斋乐琴异闻》（2009年3月，第59篇《繰繰一半 如一昨夢・二 查阜西先生》）中深情回忆道：“查阜西与王铁锤二先生的琴箫合奏《梅花三弄》，其琴音深深烙印在少年耳畔与记忆之中，至今犹新。”（照片3-3）今天的演出将带来《梅花三弄》《平沙落雁》《关山月》以及《潇湘水云》数曲。其中《梅花三弄》特别邀请到昭和音乐大学教授王明君先生担任洞箫嘉宾，呈现琴箫合奏之雅韵。此外，《潇湘水云》是查先生最擅长的代表作之一，因而也被称为“查潇湘”，广为人知。

第二章 查阜西先生对日本琴学的调查

在访日演出日程中，查阜西先生仍抽出时间，考察江户时期的琴学资料，并造访承袭东皋心越琴派的小畑治良（号松云）琴士（照片4-1），短时间内即搜集了大量信息。其成果后收入《历代琴人传》与《查阜西琴学文萃》一书中〈清代著谱琴家的师承渊源〉之〈和文注琴谱〉篇，对日本琴学在中国国内的关注起到了重要推动作用，可谓功不可没。查先生不但将日本琴学引入中国视野，其所收之资料亦成为后来琴学研究的宝贵起点。在查先生之后，日本琴学研究亦有诸多可观之进展。如已说的坂田进一先生对《东皋琴谱》《玉堂琴谱》的校勘研究，岸边成雄先生的《江户时代的琴士物语》，以及山寺美纪子女士的《碣石调幽兰第五之研究》等，皆为当代琴学史上的重要成果。

特别不能忘却的是2024年8月19日辞世的稗田浩雄先生。今日之雅集，也兼为稗田先生举行追思。

稗田浩雄先生（1945–2024）曾任世界著名智库“未来工学研究所”理事，在日本航空宇宙事业发展方面屡有建言，对日中政府高层亦多有政策提案，在此意义上，与查阜西先生的经历有些相似之处（照片4-2为先生与日本首相福田康夫、中国外交部长王毅合影）。

琴学方面，稗田先生从岸边成雄先生研习琴学史，启蒙于蔡德允先生，继而从许建、王铎诸先生学习打谱，并与吴文光先生合作研究。蓉堂居士《琴士稗田先生大人挽联序》曰：

平生琴兴，私淑左太冲，每思山水发清响；忧国铁肠，尤推李伯纪，几为邦家献远猷。

其代表性著作《近世琴学史考》（2020年，东洋琴学研究所限量刊行50部），精致考察江户时期琴士之精神世界，堪称当代琴学史研究之巨擘之作。查阜西先生所引介之江户琴士师承谱系，六十年后，经稗田先生之手，得以系统化、图谱化呈现，并更加精密而广泛（图表见12页）。

琴歌的复兴——从琴歌的瑰宝宝库《东皋琴谱》《玉堂琴谱》中各选一首琴歌演奏

因此，本次雅集亦以上述琴学调查为契机，选演两首琴歌，分别出自《东皋琴谱》与《玉堂琴谱》。此次演奏所依据者，皆为坂田进一先生校订之谱。琴歌复兴，正是查阜西先生生前尤为关切之课题。

《浪淘沙》 选自《东皋琴谱正本》

把酒祝东风，且共从容，垂杨紫陌洛城东。
总是当年携手处，游遍芳丛。
聚散苦匆匆，此恨无穷。今年花胜去年红。
可惜明年花更好，知与谁同？

此词出自北宋欧阳修。《东皋琴谱》流传本中，附有用片假名记写的“唐音”，即江户时代流行的南京官话混杂浙江音的近似语音体系（参考山寺三知先生的研究）。

查阜西先生提出，在琴歌演唱中应重视“乡谈折字”之传统，即以方言发音来贴合文字声调与旋律之间的内在结合。今日之演唱虽未严格依“乡谈折字”之法，但将以“日本唐音”呈现，亦为乡音之一种。

《梅枝》 选自《瘦兰斋珊定玉堂琴谱》

江户文人浦上玉堂所辑之《玉堂琴谱》，以平安时代流行歌曲“催马乐”（兼具中国唐风旋律与日本词句）为底本，加之琴手演变而成。其根据平安末期之《仁智要录》《三五要录》，其旋律保存了一千年前的古风。本次演奏之《梅枝》，亦见于《源氏物语》章节中，文中即有此曲吟唱，可谓传具平安古风中唐朝余韵。

催马乐《梅枝》歌辞 日语发音并中文翻译：

第一段 Mume ga E ni ki-iru Uguisu ya, Haru kakete hare.

梅枝上栖着树莺啊，春天正要来临，希望天空放晴。

第二段 Haru kakete nakedomo imada ya, Yuki wa furi-tsutsu.

虽鸣春天快到了，可眼下依然飘着雪。

第三段 Ahare soko yoshi ya, Yuki wa furi-tsutsu.

唉，多么动人啊，雪还在静静地地下着。

第三章 茶歇后，查阜西先生相关回忆分享 与 中日琴人自由弹琴

查阜西先生与叶名珮先生 朱以维 （中文原文 日文翻译和照片在第5頁）

我的恩师叶名珮先生1943年春天14岁时琴学启蒙于淮阳名家杨子鏞先生。其后1944年参加沪上今虞琴社，当时算是年龄最小的擅弹琴的社员。在今虞琴社，她先后随张子谦先生、李明德先生、徐元白先生几位老师学琴，此外受到查阜西先生、吴景略先生、沈草农先生等今虞琴社主创及叶大密先生、陈肃亮先生等师友的呵护和教诲。

叶师 1950 年底在成都参军，1952 年转业回沪后，亦常参加今虞琴社活动，此时犹能与今虞师友们学习、交流。

1957 年，叶师结婚后常会与丈夫出门旅行。在一次旅行途中，竟然非常巧地在火车上遇到了查阜西夫妇。看到一直关注的琴学后辈工作稳定，又新婚不久，查阜西很开心，特送了一对瓷鸳鸯给两位新人，愿夫妻和顺、白头到老，这对鸳鸯叶师一直珍藏。耄耋之年偶然翻出旧物，看到这对鸳鸯，依然会感念查阜西当年的心意。即便当年的故人大多已过世，但他们对青少年时期的叶名珮的扶持和帮助，始终留在叶名珮心中。

※（照片 6）2021.12.15 拍摄于家中、苏州曹小姣师姐提供。

1958 年，叶师转调包头，后又转调南昌，亦不忘今虞琴社师友，有出差或探亲的机会，便趁机拜访——去北京会想办法去看望查阜西先生、吴景略先生等；到了上海，就去看看张子谦先生和姚丙炎先生等。1960 年，叶师往北京出差，正好去看望查阜西先生，此时查阜西先生还在进行全国琴人的后续调查和资料搜集工作，望着这个他看着成长起来的后辈，作为继他们之后的后备力量，他觉得有必要也让她留下一些录音，但由于当时的环境等原因，她很久不弹琴，也没有提前练，凭着记忆弹完了《忆故人》。《忆故人》一曲由当年的“浦东三杰”之一彭祉卿先生传播开来，又由“浦东三杰”的张子谦先生传授叶师，二人皆是查阜西先生的至交好友。时隔多年后，叶师在查阜西先生面前弹奏此曲，大约二人心中都有颇多感慨。

虽然此曲在 1996 年中国唱片上海公司做“老八张”时未收录，但在 2019 年中国艺术研究院出版的《丝桐神品——古琴（1950—1970）》中，我们终于听到了这首来自六十年前的《忆故人》。细听此曲，彼时刚刚三十出头的叶师与八十岁以后的她，琴风确实发生了很大的改变。弹过《忆故人》后，叶师再弹其他的曲子就弹不下去了。查阜西先生说：“这样可不行。”叶师回道：“是不行。”然后讲了自己的困难。查阜西先生勉励她说：“你的基础很好，不要放弃，工作之余有空之时多练练。”这样的鼓励一直留在她的心里，此后即便在工作、生活及社会的变动中，她也尽可能抽出时间、腾出空间来练练琴，一直到她退休后，与其他几位琴人共同成立吴门琴社。

叶师一生坚守传统，继承查先生等琴界先贤的今虞精神，重视琴社建设，生徒遍地，在院校传承之外，摸索出一条不同的传承之路。

参演人员介绍

秋月

本名荒井雄三。美术史家、琴士。玉堂琴社发起人。毕业东京艺术大学、筑波大学研究生院艺术学专业，和北京中央美术学院贾又福山水工作室硕士研究生班。原二玄社编辑，负责台北故宫国宝书画复制工作。任教美术史于日本大学艺术学系和东洋大学文学系研究生院。主要研究方向为中日文人文化研究，尤其关注琴诗书画相关。古琴师从坂田进一老师、管派王迪老师。受到多位“文人古琴”风格大师的指教，包括吴文光、李璠、成公亮、吕建福、林友仁、徐晓英和谢俊仁等。致力于复兴《东皋琴谱》《玉堂琴谱》。

朱以維

玉堂琴社創始者の一人。朱子（朱熹）28 代目の孫として少時から伝統文化に対し広く研鑽を積む。

中国民族管弦楽学会古琴専門委員会会員、上海大風堂琴社（社長：故葉名珮先生）社員。少年時代に川派古琴の巨匠、顧沢長先生 1939-2018 に師事し、その後、葉名珮先生 1929-2022、李孔元先生、茅毅先生などの

名家の指導を受ける。琴風は安らかで落ち着いており、静かで高雅。

朱以维

玉堂琴社创始人之一。作为朱熹第二十八代孙，自幼研习传统文化。

中国民族管弦乐学会古琴专业委员会委员，上海大风堂琴社（社长：已故叶明佩先生）社员。自幼师从川派古琴大师顾泽长老师，后又师从叶明佩老师、李孔元老师、毛毅老师等名家。琴风平和沉稳，静谧典雅。

陳雅

玉堂琴社創始者の一人。蘇州吳門琴社理事。

2009 年管派（管平湖派）の古琴芸術家、喬珊先生から手ほどきを受け、2014 年吳門琴派の第三代伝承者、吳光同先生に師事。吳門派の「簡、勁、清、和」の琴風を継承。

陈雅

玉堂琴社创始人之一。苏州吴门琴社理事。古琴启蒙于古琴艺术家乔珊老师，2014 年开始师从吴门琴派第三代传人吴光同老师，秉承吴门“简、劲、清、和”的琴风。

劉宗翰

玉堂琴社創始者の一人。2017 年に来日。大阪大学、関西学院大学を経て、現在は東京大学大学院総合文化研究科にて助教として勤めている。台湾・台北出身。幼少の頃から音楽に触れ、柳琴や阮咸などの中国民族楽器を習ってきた。大学・大学院の専攻は自然科学だったが、台湾の大学にて古琴の授業をきっかけに陳雯先生の指導を受けた。

刘宗翰

玉堂琴社创始人之一。现担任东京大学研究生院总合文化研究科助理教授。

自幼接触音乐，学习柳琴、阮咸等中国民族乐器。大学和研究生院均主修自然科学，但在台湾大学修读古琴课程后，师从陈文老师。

【特邀嘉宾】

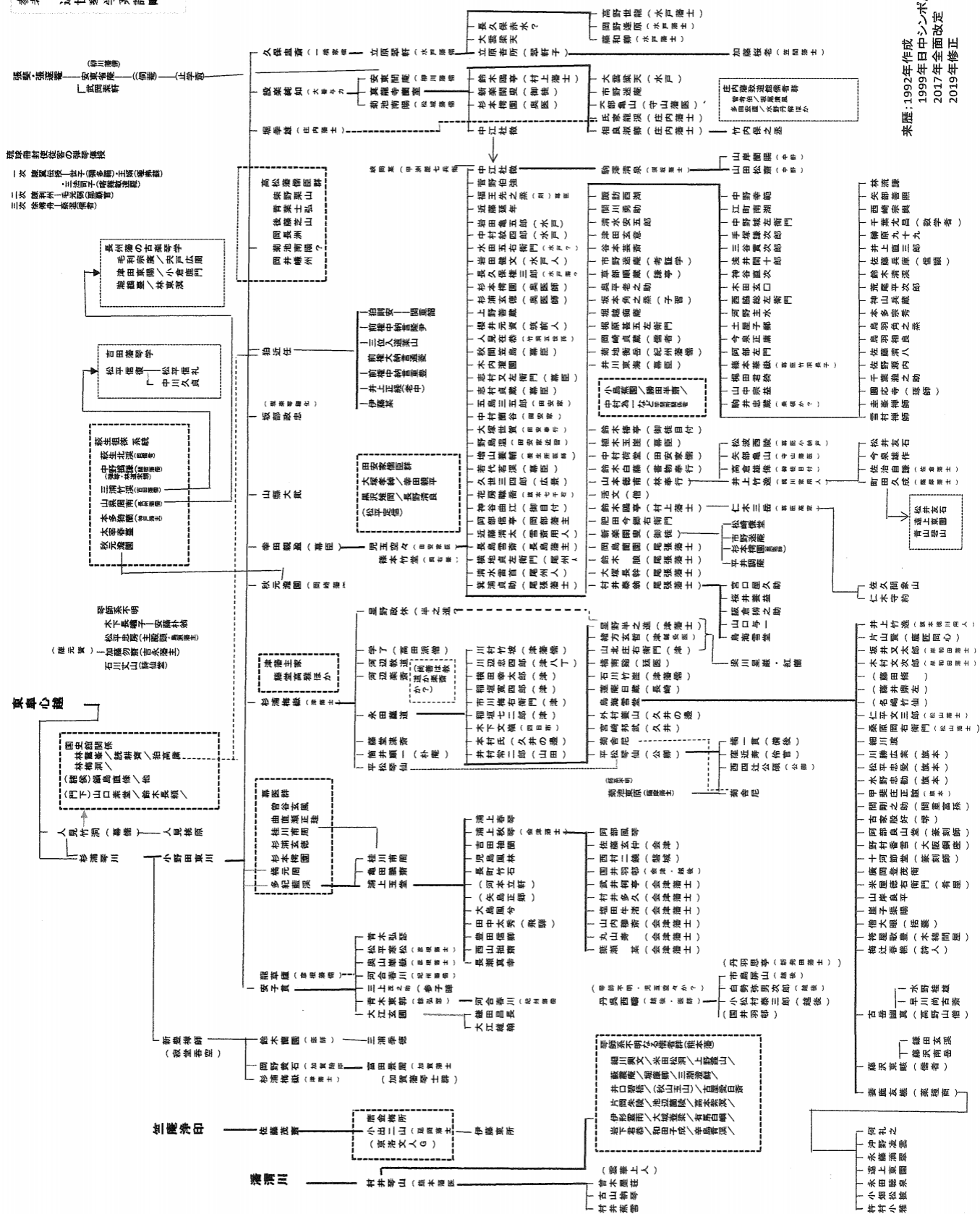
王明君（おう めいくん）

昭和音楽大学教授、東京音楽大学講師。東京藝術大学大学院にて音楽学修士号取得、専攻は民族音楽学。上海に生まれ、中央音楽学院附属中学、中央音楽学院、中国音楽学院で学ぶ。卒業後は文化大革命以降最年少の講師として中国音楽学院で教鞭を執る。これまで中国政府を代表する芸術家としてヨーロッパ・中東・アジア諸国を歴訪してきた。来日後は東京交響楽団、日本新星交響楽団、広島交響楽団、新日本交響楽団、また中国国家交響楽団、上海交響楽団などの著名なオーケストラとたびたび共演。東京・大阪・広島・岡山・沖縄・長野など各地で多数のソロリサイタルを開催している。

王明君

昭和音乐大学教授，东京音乐大学讲师。东京艺术大学研究生院音乐学硕士，专攻民族音乐学。出生于上海，曾就读于中央音乐学院附中，中央音乐学院，中国音乐学院，毕业后，作为文革以来第一个最年少的讲师在中国音乐学院任教。曾多次代表中国艺术家，由政府派遣出访过欧洲，中东及亚洲国家和地区。来日后，和东京交响乐团，日本新星交响乐团，广岛交响乐团，新日本交响乐团，以及中国国家交响乐团，上海交响乐团等多个著名交响乐团进行合作，并在东京，大阪，广岛，岡山，冲绳，長野等各地举办多场个人独奏音乐会。

参考 近世琴学系譜略



来源:1992年作成
1999年日中シンポジウムに改定
2017年全面改定
2019年修正